



口絵1



口絵2



口絵3



口絵4



口絵5



口絵6



口絵 7



口絵 8



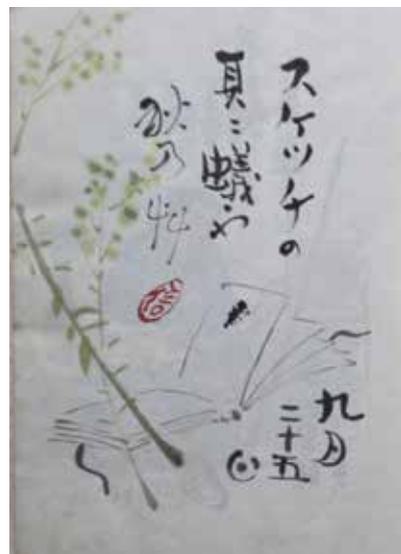
口絵 9



口絵 10



口絵 11



口絵 12

[資料紹介]

## 山脇信徳 〈絵日記〉

河村章代（高知県立坂本龍馬記念館 学芸専門員）

中谷有里（高知県立美術館 学芸員）

[Documents]

### Yamawaki Shintoku's "*illustrated diaries*"

KAWAMURA Akiyo

NAKATANI Yuri

This paper focuses on reprints of illustrated diaries that Yamawaki Shintoku (1886-1952), a western-style painter from Kochi, wrote while enrolled at the Tokyo Fine Arts School (today Tokyo University of Arts). Covering the period from September 18 until October 20, 1907, the diaries illustrate aspects of the artist's creative work, his art school studies, exchange with friends, and his lodging and general lifestyle.

[資料紹介]

## 山脇信徳 〈絵日記〉

### 1. はじめに

---

過去の高知県立美術館研究紀要（以下、紀要）で山脇信徳（1886～1952）の資料をいくつか紹介した<sup>1</sup>が、今回は〈絵日記〉（以下、日記）を紹介する。

山脇信徳は高知県出身の洋画家であり、東京美術学校（現東京藝術大学、以下、美校）在学中に第3回文展に入選した《駐車場の朝》（東京大空襲で焼失）が評判となったことが有名である。滋賀県や旧満州での教員を経て、欧州に遊学。帰国後は高知市内に暮らし、後進の育成や高知県美術展の創設など郷土の美術、文化振興に寄与した。1952（昭和27）年1月に66歳で急逝したが、今なお多くの県民から慕われる存在である。

日記は御遺族が保管されており、「山脇信徳 日本のモネと呼ばれた男」<sup>2</sup>展に出品、見開きで展示されたことがある。また、鍵岡正謹『山脇信徳 日本のモネと呼ばれた男』（高知新聞社、2002年）に日記文の大部分は紹介、詳説されたが、紹介されていない日もある。一方で絵の部分はほとんど紹介されていない<sup>3</sup>。そのため、日記の全体が明らかになっているとはいえない状況であった。

こうした状況から、本稿では、全頁の絵と文を掲載し、資料の全体像を紹介する。

原資料を河村が写真撮影し、河村、中谷が共同で翻刻を行った。その際、適宜前掲書を参考にした。また、「1. はじめに」「2. 概要等」「3. 終わりに」は河村が記述した。

### 2. 概要等

---

日記は、1907（明治40）年9月18日から10月20日の期間<sup>4</sup>の、作品制作や美校での授業の他、友人との交流、下宿での生活などを活写したものである。日記内に、白馬会に《博覧会》《小川》《海岸》の3点を持ち込む、という記述と絵がある。この3作品を出品した白馬会は第10回展である。また、彼が「文部省公設展覧会」（文展）に出品する作品制作にいそしむ様子がかかれており、その挿絵も描かれている。挿絵と実際に文展に出品された作品を比較すると、その作品は1907年の第1回文展に出品した《町の橋》と推測される。白馬会と文展への出品、この2点から本日記は1907年にかかれたものと判断した。

ただし、なぜ9月18日から1カ月間だけなのか、他の月日分の日記も書かれていたのかは不明である。

袋とじ、32丁の四つ目綴じの装丁で、〈絵日記〉という題箋が表紙に添付されている。山脇没後は実弟の信平氏が保管し、現在もその御遺族の元にある。前述の題箋を書いたのも信平氏であろうとのことである。1頁ごとの内容を目次のようにまとめた一覧が添えられているが、これも信平氏によるものらしい。

### 3. 資料写真および翻刻文

---

一、1頁ごとに記載し、頁ごとに1) 2) …と区切った。絵の部分は巻頭のカラーページ及び巻末に

まとめて掲載することとし、それぞれ口絵1…、図13…とした。

二、資料の中、日付の位置は決まっていないが、便宜上「日付、本文」の順で記載した。

三、文章の記載は原則として、右から左、上段から下段とした。同頁内に複数の時間の出来事が書かれている場合は、時間順に記載した。

四、原則として旧字は新字に直している。ただし、固有名詞と思われるものはそのままとした。

五、原本には句読点はないが、便宜上、適宜句読点をうった。

六、誤字脱字はそのまま記載し、(ママ)の表記を添えた。

七、判読不明の字は●とした。判読に不安のある字には(?)の表記を添えた。

#### 口絵1

九月十八日

九里君<sup>5</sup>と語る

(手書きで 朱文方印風に「信」)

#### 口絵2

九月二十日

長谷川<sup>6</sup>邸

これやうまい

(手書きで 朱文円印風に「信」)

#### 口絵3

九月廿一日午後

佛心寺<sup>7</sup>の二階

近藤浩君<sup>8</sup>帰京

(手書きで 朱文円印風に「信」か、「信」が「言」に)

#### 口絵4

九月廿二日午後

徳、四、浩、僕、四人の会合<sup>9</sup>

場処は四郎兄の屋敷

(手書きで 朱文方印風に「信」)

#### 口絵5

九月廿二日正午

三人で豚肉をつつく

#### 口絵6

九月廿三日夕

小林<sup>10</sup>と共に湯に入ったのはそもそも之が始(ママ)めて。

口絵 7

九月廿三日夜

題 夜寒

俳句会



近藤ニ強ひられ御供したれど一句も出ず。

(句は不明)

(手書きで 朱文円印風に「信」か、「信」が「言」に、また円の下方に線を足し、人のような形にしている)

口絵 8

九月廿四日

ほふづき乃音に夜●のそばやかな 自然

自然●●をかりて病魔を払はんとす

(手書きで 朱文円印風に「信」)

口絵 9

九月二十五日

柿の窓絵日記ものす小半日 信徳坊

(手書きで 朱文円印風に「信」)

口絵 10

九月二十五日午後

碧雲虚<sup>11</sup>来る

(手書きで 白文方印風に「信」)

口絵 11

九月二十五日

卒塔婆の裏ふく風や夜半の秋 ●●●

幽霊の句に窮したり秋乃窓 (手書きで 黒文方印風に「信」?)

破三味線たお心ゆく秋の闇

(手書きで 黒文方印風に「信」)

口絵 12

九月二十五日

スケッチの頁ニ蟻や秋乃艸

(手書きで 朱文円印風に「信」)

図 13

九月二十五日

自然パレットに親しむ

五日ハ六日の誤りなり

(手書きで 朱文円印風に「信」)

図 14

二十六日夜

自然<sup>12</sup>秋夜乃徒然をやる

図 15

九月二十七日夜

自然と共に理髪店に行く。帰途モデル婆<sup>13</sup>の所に行く。

九月二十八日午後<sup>14</sup>

嘗ての印象を呼び起して水の修正ニ殆ど小半日を費やしたれど尚面白くも出来ざりき。

時に近藤側にて解も解らぬことしゃべれど小林之を拝聴し居たりき。

図 16

九月廿八日午前

頭をもう少し右の方へ傾けてくれ給へ そうだそうだ

此日一寸コンポジションの為めスケッチをする。

図 17

九月廿八日午後

浩と共に下谷古本屋をあさる

九月廿八日午後

近藤君美術演説をやる。僕は絵日記ニ耽っていたから何をいったかさっぱりわからなかった。

図 18

二十九日午前

午前

学校に行きしも約束のモデル来らず、せめて二十五号の習作として草にても描かばやとスケッチ板に秋草を桜樹の写生。十一時頃帰る。小林、近藤、既に膳に向ひたり。

二十九日午後

頭痛激しきまま思での記を貸(ママ)りてきて、来客をもかまず寝こんで読む。

図 19

二十九日

近藤京都の子供ニ手紙を書く。自分は寝たり起きたり尚風邪の為め頭痛止まず。  
秋の夜や病みて天井乃藁人形

図 20

九月三十日  
午前  
午後小林四弦君<sup>15</sup>の画室

図 21

三十日夜  
富田君<sup>16</sup>来る

図 22

十月一日午前  
学校の庭にて写生

図 23

午後一日  
一日夕 人生観を語る  
(手書きで 黒文方印風に「信」)

図 24

二日午前  
秋風激しく今朝の写生は此様なもの  
午後ハ解剖の講義  
裸体美を解せざる余はとくにハ解剖の必要もなければ唯々久米先生<sup>17</sup>の根気よき事あきれるのみ。

図 25

二日夕  
小林傍聴。演題『犬の声』『犬の恋』近藤君演説。  
二日夕 十月  
團子坂某寺

図 26

二日夜  
神田よりの帰途。近藤マグロずし十食ひ、僕は僅かに六つ。  
立食ひ。  
神田よりの帰途。夜店にて近藤、習物絵の本三冊買ひて帰る。僕の持てるは画心紙なり。

図 27

十月二日夜

二日の夜出立ちハ斯くの如く。自然俳諧師を気取りて頭巾をかぶる。本郷の本屋より神田の文房堂<sup>18</sup>、  
帰途すし屋により、又紙屋による。行きは電車、帰りハ徒歩。いたくつかれて寝ニ就く。

図 28

十月三日

家ニ帰りしは五時頃なりき。近藤ハ和田先生<sup>19</sup>の処ニ行きて居らず。大嵯氏<sup>20</sup>の留守に頼みし手紙を見、  
其返事を此夜したたむ。湯ニいく。帰って寝る。

午前雨天の為め郊外のモデルを描くを得ずデッサンも出来されば●止ぶらりと校門を出でて足の向ふままにい  
つしか浅草公園ニ入る。一寸とスケッチせんと小供芝居ニはいる。勝頼面白くもなし。二幕見て出づれば既  
ニ一時。それより亀戸●の辺まで行きて又吾妻橋にも行く。往復徒歩にていたくつかれたり。

(手書きで 黒文方印風に「信」)

図 29

午後凌雲閣を写生す。

(手書きで 黒文方印風に「信」)

図 30

四日午前

午後

図 31

四日夜

相変わらず出たらめの近藤の演説。小林面白かつて聞く。僕ハ耳慣れたる事とて絵日記ニ耽る。

図 32

五日午後

夕飯前。処身の事ニ付自然と語る。

小林、近藤、僕、教師の批評。

黒田先生<sup>21</sup>が藝者なら藤島先生<sup>22</sup>ハ女郎だ。

つまり其画風がだね。

図 33

五日夜

此夜六人の会合。

下のおばさん踊の話、徳ちゃんハ相変わらずおしゃべり。ちいちゃんハクスクス笑ふ。蛇の話。芝居  
の話。さては世間のうわさ話まで。

図 34

五日午前

白馬会場<sup>23</sup>ニ近藤君と油絵をはこぶ。

題 博覧会

小川

海岸

会場ニハ沢山絵が出て居た。此日モデルハ待つて居たけれど曇っていたからやめた。すると日が射した。腹が立った。

図 35

五日午後

大寄君と語る。

五日夜国元ニ手紙書く。

図 36

六日午前

小林と図書館ニ行く。僕は即興詩人<sup>24</sup>。友ハ蜜蜂飼養法と云ふ書物。美術家の何ニすねていか更ニ解せず。

図 37

六日午後

近藤の寝三味線。

同夜。此夜小林、瀬祭書屋の俳書<sup>25</sup>を読む。近藤例の演説。僕は日記とおしゃべり。

図 38

月曜日のことなれば新なる女モデルを画室ニ描く。午後ハ谷中の墓地にスケッチに出掛ける夕方家ニ帰れば近藤入浴中なりき。

図 39

七日夜

近藤、清元の師匠を訪る途すがらモデルの婆の家に立寄りしも留守。清元の師匠も折柄お湯に出た後。足を返してモデル婆の家。今度は帰り居りたれば何くれとあすのモデルにつきて頼む。再び清元の師匠が家、未ニ帰らぬ都の●、三辻をゆきつもどりと待てども待てども帰らねば藤井の画室を訪ればやと二人して日暮里の里に出ず。心地よき画室ニ興ありげなる藤井君<sup>26</sup>の御顔。時の移るをも忘れて一時あまりも語り興じぬ。帰途師匠尚も帰り居らず。

此夜一時頃まで近藤君と将来につきて寝物語り。

図 40

八日夜

四君の来客。

図 41

八日

例の通り学校の門をくぐる八時よりの用器画、十時頃黒田先生の御出。今日は黒物一●の紋付と云ふ出立なり。午後のモデル描かずに帰す。

午後ハ神田にスケッチ。夕方帰れば九里、●君、富田君、二階の席を連ね居たり。やがて小林も帰り来り●●などありて遊び興じたれど、眠気さしたる余の面白くもなければ御免蒙り陽に横はる。

図 42

九日午後

午前ハデッサン。午後ハ解剖。今日は案外面白ろ（ママ）かりき。夕方廣瀬君<sup>27</sup>突然来る。此日朝よりの雨、風さえ加はって興なし日なり。モデル描けざりしをくやむ。

図 43

九日夜

廣瀬君と語る。

九日夜

春雨にしっぽりぬるる鶯の羽風二香ふ梅か香の… \* 端歌

図 44

十日夜

題 秋の水 熟柿 山門 散歩

連座

僕はいやと云ふ。小林はやれと云ふ。やるやらぬで一寸三十分。さて始めて見ると何れもそろって一句も出ない。出るのはクッサメと吐息ばかり。

夕栄の色其儘や秋の水

（手書きで 黒文方印風に「信」）

図 45

十日午後

夕暮まで学校の庭で写生。

図 46

十一日午後

真田と久米<sup>28</sup>と来て僕のもでるを写生する

図 47

十一日夜

清吉菊岡亭にて佐倉宗五郎をやる。

此夜、近藤、徳ちゃん、大●さん、ちいちゃん、それから僕が今一人御供して菊岡亭ニ浮れ節を聞きニ行く。

図 48

十二日

学校の庭で写生していると近藤が来た。向ふの桜の木ニもたれてしきりに僕の描いている姿を写して居った。

図 49

十二日夜

此夜、おばさんと一所（ママ）ニ根津の通へでて栗をどっさり買って帰る。近藤、旦那さんと共に御馳走になりしが、おしまいには指の先をいたくした程。

図 50

十月十三日

秋雨しげくしてつれづれなるまま昼寝して書を読む。お可笑しくも面白くもなき日なり。

図 51

十月十四日

此日も雨なれば写生も出来ず、午前は学校、午後は二人連れにて近頃御無汰沙（ママ）なれど九里氏の屋敷を訪れたり。一句あり。

秋雨の巷レールに油かな

図 52

十月十五日

近藤君ニ二客ありたれど橋の絵の修正ニ夢中なりし我ハ御客去るまで挨拶も忘れてたり。夜は富田君見えられ小林君も家ニあり。三味線ニうつつをぬかすは之等の人々なり。

図 53

十月十五日夜

唐紙、絵日記に描きつくして四五日休みたる今日十七日の夜、記憶を呼びての此日記。さて、如何事たるとしきりにこうべ傾けたるも思ひ出づることもなし。

図 54

十月十六日夜

上の原、御殿場の旅行はいと興ありければ思ひ出の節々絵日記ニものせばやと九里氏の宅にて事定ま

りたれば此夜近藤兄と根津の通りニ約束の紙西の内を買ひニ出づ。  
其帰るさ草(?) 屋にて栗を買ひて戻りしが三日月のさやけくうるはしき夜なりけり。

図 55

十月十七日

午後ハ校庭ニもでる

神堂●●のよき日なぢ。同宿の友と団子坂ニ菊人形。菊と云ふはかたばかりニて人形はおろか、笛、太鼓ニ金目いとはぬ大仕掛け、これでは人形芝居といはん方寧ろよからんと思ひぬ。

図 56

十月十七日夜

静かなる秋の秋の秋をあざめき興ずるは愚かなることと思ひつきたれば玄関の四畳にこもりて読書を始む。十二時頃ニ階ニ上れば近藤絵日記ニ耽り居たれば我もと共に机を並べて四五日来休みし分を筆にしつ。

図 57

十月十七日夜

十二時より一時まで絵日記

図 58

十月十八日

午前は絵日記と学校。午より例の外光人物五時頃まで描きしに小林君白馬会よりの帰りなりとて来たりをわれも写生の終わりし時とて、共ニつれ立ちて帰らんとして顧みれば日ハ西ニ落ちて夕月東の空ニ麗はしく草も木も●紫の薄絹をかけたるが如し。

図 59

十月十八日夜

五軒町あたりの縁日面白くぶらぶらと電車にもものらずニ歩けばいつしか万世橋ニ出づ竹見屋ニ行きカラスグチの修復を頼みたれば日数を取るとの話に先ずさしひかへ、電車ニて帰りしは夜の十時なり。

図 60

十月十八日夜

湯から出て井戸にくると秋月が美しい。

図 61

十月十九日午前

午前十時頃コンパスを修復せんとして長谷川と共に学校より帰りしがふと思ひ出して長谷川には御免蒙り国元ニ手紙を記(?)す。友ハたいくつまぎれ気まぎれに僕の絵日記を取って見始めたり十二時頃近

藤帰る。此日国より手紙くる。飯もくはずに長谷川と磯谷屋<sup>29</sup>に向ふ。

今日は秋晴れの良き日なり。

図 62

十月十九日午後磯可屋に行く

磯谷にて二十五号の額縁あるかと聞けば夕方にならねば解らぬとの事ニ再来を約して九里の家ニ向ふ。近藤より頼まれし旅行用制帽の一件あればなり。

図 63

十九日午後

玄関より音へば見なれぬ大入道現れ出づ、よく見れば我友九里四郎兄なり。それも其筈なり。昨日までチックに櫛あと、美しく髪の毛一ツこぼさぬよき人なりければ、これは近頃珍らしきおつむりのかなと打興じて、いつも長腰すえる男の今日ハ早やくきり上げて近藤の為め制帽かりて帰途につく。途にて九里と別る。

図 64

十月十九日

日比谷公園奏楽堂ニ演奏を聞く。

九里より帰り途日比やを過ぐれば折柄の演奏日。西の国の奏楽とやら我等ニは解り兼ねれど大勢の人数、鮮かに居たれば我れもと、とあるベンチに。

図 65

十月十九日

九里の家より帰りの日比や公園を過る。秋草の花乱れし中を佳人の散歩。谷中に●住ひせる我目には近頃珍ら（ママ）しく美しと覚えぬ。

図 66

十月十九日夜

十一時頃近藤君帰り、明後日旅行の用意。なにくれといそがはし。

図 67

十月十九日

夜電車にのると紅葉狩りの帰るさと見えて二三人の男、皆取り取りに紅葉を手をしている。色赤か赤かと麗しきを見て、秋も早やたけたと思ふた。

紅葉狩電車に満つや葉の香

図 68

十月二十日

今日ハ愈々出品持込期限なり。多分はねらることとは思ひながら面白半分出して見たく、朝七時頃より起きいで顔も洗はず修正ニかかる。午後四時頃まで一生掛（ママ）命。

#### 図 69

十月廿日午後

文部省公設美術展覧会ニ橋の画を持ち込む。

診査に許可さるや否や運命は天ニ委せて。此夜京より手紙。

#### 図 70

十月二十日

家内一同出でて行を盛にす。明日の朝は君起次第起してくれと頼んで●て寝ながらいつも寝坊ニ似合ず、今朝は独りではね起き、二階を走り下りて時計を見、何ニまだ早いと又上がってきて蒲団にすわり込み中学時代の●想を僕ニ語る。間もなく下から「八時だよ早く、早く」

此の朝、近藤出立。久しぶりにて洋服姿。甲斐甲斐しく八時までニ新橋ニ衆合との事ニ顔も洗はず飯を済ませ八時頃家を飛び出す。

それは車屋さんの草鞋だよ、と云ふ声にびっくり仰天し、あわてふためき洋服も台無し。

#### 図 71

わっとまん、コンパスの用事にて午飯がすむと神田竹見屋<sup>30</sup>ニ行き又文房堂、生雲堂<sup>31</sup>も行きしが、昨夜風呂場にてはきかへらし下駄、板の様なるをはきたれば神田路の行きかひ、不忍池畔のどぶ途、歩く時の苦しさ、きびすにはどろをはね上、拇指には力をこめ、絶えず足のほとりを眺め、●苦して歩めども足先きニはどろを塗り、持ちたるワットまんニは土をはねて万苦を冒して帰りしは丁度四時頃であった。

## 4. 終わりに

---

山脇の美校時代の動向を知る資料としては、今回の〈絵日記〉以外に、1908（明治41）年12月19日から翌3月30日までの「日記」（第1の日記）、1910（明治43）年5月1日から7月17日までの「日記」（第2の日記）がある<sup>32</sup>。〈第1の日記〉〈第2の日記〉の前に位置する。鮮やかな挿絵と軽妙な文章が相まって、楽しげな印象の〈絵日記〉からガラリと変わって、〈第1の日記〉〈第2の日記〉は原稿用紙に文字だけで書かれ、内容の軽妙さはなくなり、やや重い印象さえある。また、〈絵日記〉では実名で書かれていた友人、知人や教員たちの多くがイニシャルとなっている。

3つの日記の間、山脇は

1907年白馬会への出品（絵日記に記載有）

第1回文展入選（出品までが絵日記に記載有）

1908年第2回文展に出品するが選外

1909年 第3回文展に《停車場の朝》入選、話題となる

1910年 林忠正邸に印象派の作品を見に行く（3月11日）

第13回白馬会に《雨の夕》<sup>33</sup>等を出品（5月5日に記載あり）

と積極的に制作活動、交流を行っている。1911（明治44）年4月の「山脇信徳作品展」の出品作品をめぐって〈絵画の約束〉論争がおこり、雑誌上で激しい論争となるが、山脇が美校を依頼退学し、滋賀県に美術教師として赴任することで終わってしまった<sup>34</sup>。

今回は、資料紹介ということで絵の紹介と翻刻のみとした。日記内には記載された多くの地名、人名、店名を詳細に調査することで、当時の美校生の生活を知ることができると思われるが、それらの注釈、分析については次回の機会としたい。また、今回の〈絵日記〉から〈第2の日記〉、そして山脇が東京を去るまでの期間、彼自身の動向と当時の美術界の動きを見ていくことも今後の課題としたい<sup>35</sup>。

なお、日記の終わり近く、山脇は文展に出品する作品は「多分はねらるること」「審査に許可さるや否や運命は天ニ委せて」と気弱なことを書いているが、無事に入選したことを記載しておく。

最後に、〈絵日記〉の写真撮影、資料紹介を快くご承諾くださった御遺族の方、翻刻にご協力くださった「古文書の会」の皆さまにお礼を申し上げます。

---

## 註

- 1 『資料紹介 山脇信徳 - 残された原稿から（1）』（河村、高知県立美術館研究紀要第1集、1999年）および『資料紹介〈山脇信徳の美校時代日記〉』（河村、「高知県立美術館研究紀要第2集」、2000年）参照
- 2 2000（平成12）年4月29日から6月11日まで、高知県立美術館で開催された。
- 3 10月9、10、20日の3日間が資料写真として紹介されている。他、「山脇信徳 日本のモネと呼ばれた男」展図録に掲載された鍵岡による「山脇信徳 人と作品」に9月22日、10月2日、8日、20日が同様に紹介されている。
- 4 『資料紹介〈山脇信徳の美校時代日記〉』（「高知県立美術館研究紀要第2集」、2000年）に「明治40年9月18日から10月21日まで」と記載したが、誤りである。最後から2頁目に「20日」とあるため、次頁は単純に翌日21日のことと考えたためと思われる。
- 5 九里四郎。
- 6 同級生の長谷川昇と推測される。
- 7 629年に日演が浅草で開山し、1648年に谷中に移ってきた日蓮宗の寺院と考える。
- 8 近藤浩一郎。
- 9 徳は小林徳三郎、四は九里四郎、浩は近藤浩一郎を指す。
- 10 小林徳三郎。
- 11 同級生である大谷浩の俳号。近藤とともに美校の文芸倶楽部で活躍していた。
- 12 近藤浩一郎。「自然」は彼の俳号である。
- 13 絵画モデル派遣業を営んでいた宮崎菊と推測する。モデルの経験のある宮崎は、美校に西洋画科が設置された1896年に仕事を始め、「宮崎モデル紹介所」を谷中に開業した。それまでは、学生が当番を決めて、街でモデルにむきそうな人に声をかけていたという。
- 14 ここで描いている作品は、日記が書かれた1907年10月25日から11月30日まで開催された第1回文部省公設美術展覧会（文展）に出品された《町の橋》である。以後も、10月15日《橋の絵》の修正をすることや、10月20日にもぎりぎりまで修正を行うことを記している。
- 15 不明。鍵岡氏は小林徳三郎の俳号かと推測している。
- 16 不明。
- 17 久米桂一郎。美校では「美術解剖学」1887年に開設された。久米は、森鷗外の後任として講義を受け持っていた。
- 18 現在も続く画材店「文房堂」のこと。文房堂は1887年に神田区小川町に中西屋書店の一部を借りて開業、1906年に独立して現在の神田神保町に店舗を新築した。

- 19 和田英作。
- 20 不明。
- 21 黒田清輝。
- 22 藤島武郎。
- 23 1907年10月7日から11月5日まで開催された第11回白馬会。信徳はここに記すように《博覧会》《小川》《海岸》の3点を出品。  
《海岸》はその後、美校に買い上げとなり、現在は東京藝術大学大学美術館の所蔵である。
- 24 春陽堂から森鷗外によるアンデルセン『即興詩人』の訳書初版が発行されたのが1902年であることから、信徳が読んでいるのもおそらく同書と思われる。
- 25 正岡子規の俳句論。
- 26 同級生の藤井禎三郎。
- 27 不明。
- 28 真田、久米、ともに不明。「先生」等の敬称がないことから、久米は久米桂一郎ではないと考える。
- 29 磯谷商店を指すと考える。1892年に芝区愛宕町に西洋風額縁製造業を始め、1905年に芝区新櫻井町に移転した。現在は神奈川県藤沢市で営業。
- 30 神田小川町にあった竹見屋洋画材店。戦後はタケミヤ画廊として再興された。
- 31 浅尾佛雲堂の誤りか。
- 32 日記の名称については、河村が「山脇信徳」展開催時に便宜上付けたものであり、山脇自身は名称をつけていない。
- 33 志賀直哉旧蔵作品。山脇の死後、高知市に志賀自身から寄贈された。現在は高知市立中央公民館所蔵、高知県立美術館に寄託されている。
- 34 1911年琅玕堂での「山脇信徳氏作品展覧会」に対する木下空太郎の展覧会評が発端となった（『画界近事』、1911年「中央公論」）。木下は画家が得た感激を無秩序に色をとり、画面に塗り付けただけであり、技巧に乏しい、と評した。さらに、画家と鑑賞者の間には一定の共通認識（絵画の約束）が必要である、と述べた。これに対し、山脇が反論し、さらに武者小路実篤が加わり、論争は1912年2月まで続いた。
- 35 1909年11月3日の日付がある断片には「無形画」の言葉が記されている。翌年の〈第2の日記〉にも「無形画」について考えていることが書かれており、色と光だけで描かれた、抽象画のような作品について考えていたようである。この頃は文展に入選した《駐車場の朝》が高く評価された時期である。高村光太郎はこの作品をめぐり、石井柏亭と論争となった。高村は翌1910（明治43）年に「緑の太陽」を発表し、内面から出てくる色彩を重んじることを主張した。山脇のこの頃の日記には「色」についての記述が頻繁に出てきており、彼の交流関係や美術界の動向とその思考の関係は興味深い。



图 13



图 14



图 15



图 16



图 17



图 18



图 19



图 20



图 21



图 22



图 23



图 24



図 25



図 26



図 27



図 28



図 29



図 30



図 31



図 32



図 33



図 34



図 35

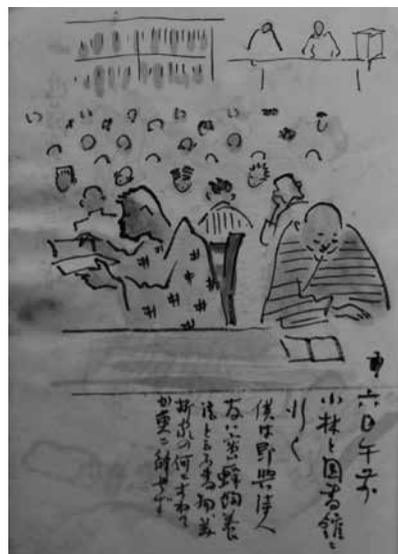


図 36



図 37



図 38



図 39



図 40



図 41



図 42



图 43



图 44



图 45



图 46



图 47



图 48



図 49

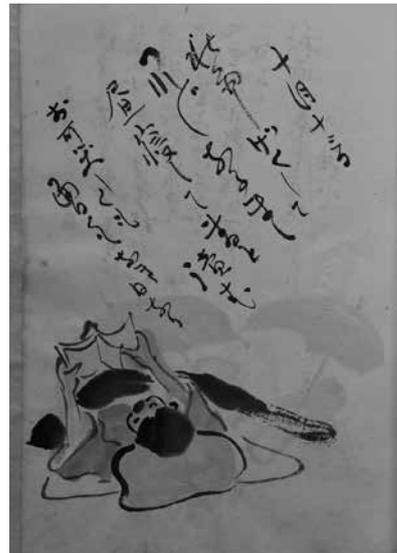


図 50



図 51

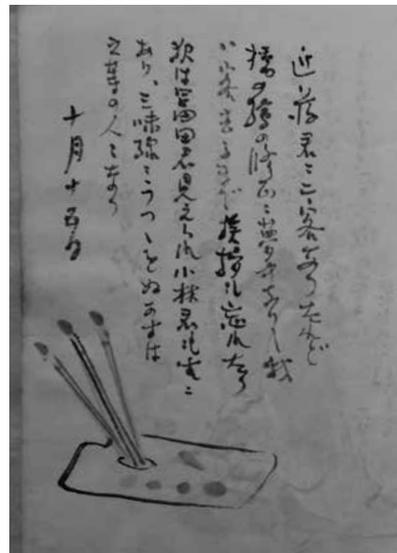


図 52

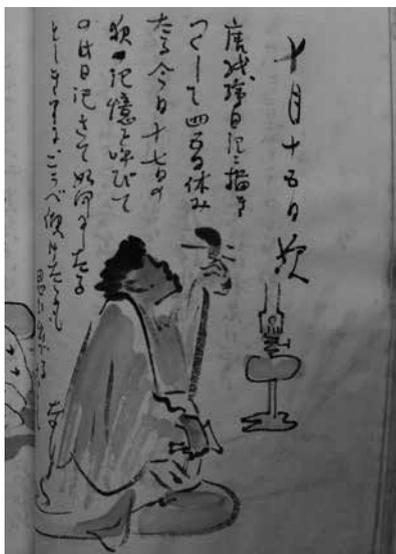


図 53



図 54



図 55



図 56



図 57



図 58



図 59



図 60



図 61



図 62



図 63



図 64



図 65



図 66



図 67



図 68



図 69



図 70



図 71



図 72 (表紙)